

令和元年6月5日現在

機関番号：32686

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13151

研究課題名（和文）新しい東洋の身心論とエコロジカル・エンボディメント理論の国際発信

研究課題名（英文）International sending of a new East-Asian theory of mind-body relation and the theory of ecological embodiment

研究代表者

河野 哲也（KONO, Tetsuya）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：60384715

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、東洋的な身心論と現代の心の哲学と心の科学に見られる新しい動向を融合させ、「エコロジカル・エンボディメント」という新しい立場を確立し、洋の東西を超えた心の哲学と諸科学の新しいパラダイムとして国際的に発信することを目的とした。同研究をもって、S.Gallagher氏、J-M.Roy氏、J.He氏、A.Bernard氏を中心とした身体性認知科学のグループと、C.Kayser氏を中心とした文化・美学的なグループの2つのグループと、継続的な共同研究と発表を行う関係性を構築できた。前者のグループでは、今後この関係を足場に、比較文化論的な身心論の国際雑誌を作る計画を開始している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新しい身心論を洋の東西を超えて探求し、心の現代哲学と諸科学のためのポストモダンなパラダイムシフトに寄与した。国際心理学会、東アジア現象学会、国際理論心理学会、日本哲学国際学会、世界哲学会などの国際学会において、連続性のあるシンポジウムやワークショップの形で研究成果の発表をした。S.Gallagher氏、J-M.Roy氏、Jing He氏、A.Bernard氏を中心とした身体性認知科学のグループと、C.Kayser氏を中心とした文化・美学的なグループの2つのグループと、継続的な共同研究と発表を行う関係性を構築できた。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed at establishing a new philosophical perspective on the mind-body relation, named as "ecological embodiment", which integrates East-Asian traditional theories, contemporary philosophy of mind, and contemporary cognitive sciences and at organizing international collaborative research groups on the topic. We have organized a series of workshops and symposium on the topic with international collaborative researchers at many international conferences and made two international research groups: one with S.Gallagher, J-M.Roy, J.He, and A. Bernard, and another with C.Kayser.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：東洋の身心論 現象学 生態心理学 エンボディメント 身体性認知科学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

現代の哲学と人文諸科学は、ポスト・コロニアリズムの思想運動を無視できなくなっている。ポスト・コロニアリズムは、近代哲学の植民地主義的で、自民族中心的で、男性中心主義的で、人間中心主義的な側面を批判してきた。心の哲学を含む分析哲学はポスト・コロニアリズムから距離を取ってきたが、もはやその批判の例外であり続けることはできなくなっている。近代的な心の概念は、暗黙のうちに西洋の、健康な、成人男性の、中流階級の「心」をモデルにしてきたからである。理論的心理学や批判心理学、心理学史は、心の諸科学（心理学・認知心理学・臨床心理学・ロボティクスなど）について同様のことを指摘してきた。心の哲学と心の諸科学は、ポストモダンの時代において脱構築されるべきなのである。

近年、心の哲学や諸科学において提起されている「拡張した心」「身体化した心」「イナクティブな心」といった諸概念は、従来の近代的な心の概念を超越しようとするものである。しかしながら、これらの諸概念をもってしても、いまだに、個人中心主義的で、男性中心主義的、本質主義的、そして身心分離的な傾向を乗り越えられないでいる。これは、心の研究が、主に西洋文化のなかで追及されていることと無関係ではない。

### 2. 研究の目的

心の哲学と心の諸科学における「心」の概念は、暗黙のうちに、西洋の、健康な、成人男性の、中流階級の「心」をモデルにしてきた。しかしポスト・コロニアル時代である現代では、これまでとは異なった伝統と視点のもとで従来の心の概念を脱構築し、新しい時代の心身論を再構築しなければならない。そこで本研究では、東洋的身心論の観点から心の哲学と心の諸科学を脱構築し、東洋的身心論と新しい心の哲学と心の諸科学の動向を融合させたエコロジカル・エンボディメント理論を、心の研究のための新しいパラダイムとして国際的に発信する。主に、3つの大きな国際学会において、東洋的身心論と現代の新しい心の哲学と心の諸科学の融合をテーマとしたシンポジウムを企画した後、アンソロジーを出版し、広く世界に発信する。

本研究では、東洋的身心論と現代の心の哲学と心の科学に見られる新しい動向を融合させ、「エコロジカル・エンボディメント」という新しい立場を確立し、洋の東西を超えた心の哲学と諸科学の新しいパラダイムとして国際的に発信することを目的とする。エコロジカル・エンボディメントとは、人間の行動を、身体と環境との間の相補的で文脈鋭敏な相互作用の中から生じるダイナミックな過程として捉える立場である。言い換えると、人間存在を、環境と他者とさまざまな関係を取り結ぶことを通して流動的に変化するネットワーク状の存在としてとらえ、人格や心についても本質主義的・実体主義的な理解を放棄し、境界のない流体として把握する立場である。これらの発想を東洋の伝統的身心論にも見出しながら、それら豊かな源泉を、現代の先端的な心の哲学と諸科学へと接続していく。この観点が導入されれば、従来の心の哲学や諸科学に、従来とはまったく異なった研究展開をもたらす可能性を持っている。

具体的には、東洋の仏教や儒教などにおける身心論の専門でありながら、現代の心の諸理論を知悉した国内外の研究者、および、心の哲学や心理学を専門としながら東洋的身心論の現代的な再興に強い関心を持つ研究者とで共同研究を行い、それらを統合した理論を協働して構築する。すでに河野は、本研究に先立つ数年間、国内外の東洋的身心論の専門家と研究会やシンポジウムを繰り返し開催し、2015年には、京都カンファレンスと称した心の哲学の刷新を目的とした自主シンポジウムなどを開催して、理論的なすり合わせを行ってきた。東洋思想と西洋哲学の垣根を越えた交流は、これまであまりなかったものであり、あったとしても思想史か比較文化論的な分野に留まっていた。本研究は、新しい身心論を洋の東西を越えて探求し、心の現代哲学と諸科学のためのポストモダンなパラダイムシフトに貢献しようとするものである。

### 3. 研究の方法

(1) 河野と研究協力者の伊東貴之氏、田中彰吾氏の3名は、本研究に先立つ数年間、国際日本文化研究センターにおける共同研究や、日本心理学会でのシンポジウムや科研費研究会(基盤(A)「知のエコロジカル・ターン」)などを通して頻繁に交流し、本研究の理論的基盤について共同で議論してきた。現代の最新の心の哲学と諸科学は、近年、根源的な位相において東洋的身心論に注目しつつある。これまでの共同研究を通じて、伊東氏がこれまで呈示している東洋的身心論が、河野が探求してきた「拡張した心」や「イナクティブイズム」のような最新の心の哲学の立場、および、田中氏が継続的に研究してきた心理学や認知科学におけるエンボディメント理論のような新しい動向などとも、より深い次元において結びつき、これまでありがちだった単なる比較論や表層的な類似性の指摘を超えて、新しい心の研究のパラダイムを形成しうることを認めた。そのため、東洋的身心論の観点と現代の新しい心の哲学と心の科学の内容と融合させ、新しい研究パラダイムを提唱するための理論的・方法論的基盤を共同研究によって確立した。

(2) 本研究では、(1)の認識をさらに深め、さまざまな研究者との共同研究や共同発表を通して、東洋思想と現代の心の理論の融合が、漠然たる文献研究を超えて、科学的かつ実践的な方法論の基礎となりうることを示すため、洋の東西を超えて「新しい身心の哲学」という国際連絡会を設立して共同研究を行うことをめざした。

(3) 具体的には、2016年国際心理学会、東アジア現象学会、2017年国際理論心理学会、日本

哲学国際学会、2018年世界哲学会などの国際学会において、連続性のあるシンポジウムやワークショップといった形での研究成果の発表を軸にして共同研究を推進した。共同研究では、学会での発表の前段階として、それぞれに文献を研究し、自主研究会を開いて互いの研究成果を検討し、理論を精緻化して擦り合わせ、とくに、心理学や認知科学の現代的な知見を東洋的身心論の観点から解釈し、新しい身心と環境との相関関係についての概念図を作成し、これらの理論の実践的な意味を考察した。

(4) 目的である東洋的な身心論の国際発信として、S.Gallagher氏、J-M.Roy氏、Jing He氏、A.Bernard氏を中心とした研究グループと日本の研究協力者と共に、比較文化的な身心論に関する国際雑誌を作り、そこで今後この研究のさらなる展開を行う。

#### 4. 研究成果

(1) H28年度は、予定通りに、31回国際心理学会(ICP: The 31st International Congress of Psychology)にて、研究協力者である伊東氏、田中氏に加え、T.Kasulis氏(オハイオ州立大学)を発表者として招聘シンポジウム「自己、身体、心の統合的研究：洋の東西を超えて」を開催した(基盤(A)24242001と共催)。また、6月には南山大学宗教文化研究所が主催で行われたViews of Watsuji Tetsuro from around the Worldでの研究発表、12月には東京大学で開催された東アジア現象学会(PEACE)では「エコロジカル・エンボディメント」の観点に立った研究発表を行った。以上に加えて、2冊の共著論集を出版した。同時に、2017年度、研究代表者の所属大学で行われる国際理論心理学会(ISTP)に向けての事前準備(シンポジウム、招聘講演会)を行った。

(2) H29年度は、7月には台北(台湾)で開催された日本哲学国際学会(International Association of Japanese Philosophy 2017 Conference)にて研究発表を行った。8月には、研究代表者を開催委員長として本務校立教大学にて、国際理論心理学会を開催し、300名の参加者を集めた。ここで本研究テーマを追求したシンポジウムや講演会を複数オーガナイズし、東洋的・日本的な視点からの理論心理学・哲学的心理学へ貢献した。9月には、日仏哲学会での女性と母性をテーマとした比較フェミニズムのシンポジウムを企画実施した(明治大学)。同じく9月には日本哲学会主催の第5回日中哲学フォーラムを、日本哲学会国際交流委員の主催者のひとりとして実施した(立命館大学)。12月には、A.Berque氏を中心とした日本とフランスの人類学と哲学に関する日仏比較文化研究会を、フランス社会科学高等研究所(パリ、フランス)にて開催し、研究発表を行った。2018年3月には、日仏女性研究学会、日仏哲学会、日仏会館との共催で『国際女性デー記念シンポジウム、核の時代の個・種・ジェネレーション：私たちの未来をいかに建設するか』を実施し、研究発表を行った。

(3) H30年度は、さまざまな機会をとらえて、新しい解釈と現代の心の哲学、認知科学、心理学との共同のもとに東洋的な心身概念の再活性化を目指した。7月には法政大学江戸東京研究センター主催のシンポジウムで、ベルクの風土論と現象学的な身体論を統合させた立場から、江戸東京の景観について論じた。8月に中国北京で開催された世界哲学会議は、この3年間の研究の総仕上げ的なイベントであった。研究協力者の田中彰吾氏、伊東貴之氏、犬塚悠氏にくわえて、Chin-Ping Liao氏、J.Krueger氏を招聘してシンポジウムを実施し、多くの観客を呼ぶことができ、国際交流も深まった。このテーマは、東西の心身論を比較して論じることにあり、3か国の観点から新しい心身関係概念の提案を試みた。9月には、上海、華東師範大学にて、S.Gallagher氏、J-M.Roy氏、Jing He氏とともに、KAL Workshop: Body matters, The Many faces of Embodied Cognitionという3日間のワークショップを行い、このグループで米・中・日・仏・台湾を中心として、継続的な研究会を開催することが約束された。同9月には日本心理学会で、学会企画のシンポジウムで感情に関する文化比較のかつ理論心理学的な発表を行った。また、12月には、パリ第7大学でC.Vial Kayser氏の主催する東西芸術言語セミナーで“Le kata dans la philosophie japonaise”という講演を行った。本研究の大きな目的である身心論の国際比較研究会については、J-M.Roy氏、A.Bernard氏を中心とした身体性認知科学のグループと、C.Kayser氏を中心とした文化・美学的なグループの2つのグループと、継続的な共同研究と発表を行う関係性を構築できた。

(4) 以上の共同研究をもって、S.Gallagher氏、J-M.Roy氏、Jing He氏、A.Bernard氏を中心とした身体性認知科学のグループと、C.Kayser氏を中心とした文化・美学的なグループの2つのグループと、継続的な共同研究と発表を行う関係性を構築できた。後者のグループではアンソロジーの発刊を計画している。前者のグループでは、今後この関係を足場に、比較文化論的な身心論の国際雑誌を作る計画を開始している。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

河野 哲也、知覚の扉は開き、一切の欲は解消したか、メルロ＝ポンティ研究、査読無、21巻、2017、68-83

DOI:10.14937/merleaujp.21.69

[学会発表](計15件)

河野 哲也、Le kata dans la philosophie japonaise、Seminaire: Art et experience corporelle, approches interarts et Asie/Occident、2018  
河野 哲也、Technique and Musicality、KAL Workshop: Body matters, The Many faces of Embodied Cognition、2018  
河野 哲也、エモーションって何?: 感情と法、日本心理学会第 82 回大会企画シンポジウム『感情をめぐる二つのアプローチ: 哲学と心理学』、2018  
河野 哲也、Considering Bodily Boundaries From Comparative Perspectives In The Philosophy of Body and Mind、24th World Congress of Philosophy、2018  
河野 哲也、荒野と名前のない海と: 江戸東京の原意味、法政大学江戸東京研究センターシンポジウム『風土 (FUDO) から江戸東京へ』、2018  
河野 哲也、日本の女性の個人をどうとらえるか: 夏目漱石・与謝野晶子・平塚らいてうにおける種と個人の相克、国際女性デー記念シンポジウム: 核の時代の個・種・ジェネレーション、私たちの未来をいかに建設するか、2017  
河野 哲也、L'existentialisation de la technique、3e Rencontre franco-japonaise en anthropologie et philosophie: Questionner le paradigme de la technique、2017  
河野 哲也、女性と母の哲学の展開: フランス哲学を出発点にして、日仏哲学会 2017 年秋季研究大会、2017  
河野 哲也、Mind as an actor-network、The 17th Biennial conference of the International Society for Theoretical Psychology、2017  
河野 哲也、平塚らいてうの「生命」概念、International Association of Japanese Philosophy 2017 Conference: Globalizing Japanese Philosophy: From East Asia to the World、2017  
伊東 貴之、Essays on Mind, Body and Human Nature: Reconsidering the Philosophical Terminology of Neo-Confucianism、The 31st International Congress of Psychology、2016  
田中 彰吾、Reconsidering the self in Japanese culture from an embodied perspective、The 31st International Congress of Psychology、2016  
河野 哲也、The Place of thinking、The 31st International Congress of Psychology、2016  
河野 哲也、Introduction and An alternative concept of mind from the perspective of ecological phenomenology、The 31st International Congress of Psychology、2016  
河野 哲也、和辻とケアの倫理、Views of Watsuji Tetsuro from around the World、2016

〔図書〕(計 2 件)

河野 哲也他、Chisokudo Publications /Createspace Independent Publishing Platform、Critical perspective on Japanese Philosophy、2016、438(363-383)  
河野 哲也他、春秋社、日本文化 はどこにあるか、2016、248(105-140)

〔その他〕

ホームページ等

<https://www2.rikkyo.ac.jp/web/tetsuyakono/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

氏名: 伊東 貴之

ローマ字氏名: (ITO, takayuki)

氏名: 田中 彰吾

ローマ字氏名: (TANAKA, shogo)

氏名: 犬塚 悠

ローマ字氏名: (INUTSUKA, yu)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。